



## ●中国で生産を始めるに当たって思うこと

兼房株式会社

取締役会長 **渡邊 浩**

当社での海外生産は18年前に東南アジアの合板および木材加工用刃物の需要に応えるため、インドネシアに新しい工場を建設し「PTカネフサインドネシア」を設立したことに始まります。途中、ルピア通貨の暴落等、数多くの苦い経験をしましたが、現在は当社の東南アジア地域の工業用刃物の生産供給基地として順調に発展しております。

また、一年半前に中国江蘇省昆山市で「昆山兼房高科技刀具有限公司」を設立しました。その工場の建設が完成し、設備搬入も終わり昨年12月から工業用機械刃物の生産を開始しました。当初は欧米向け輸出品の生産が主体ですが、将来的には中国市場での販売を見据えております。

ここ数年の間に世界経済は、目まぐるしく変貌し、今は中国経済のあまりの急速な発展振りに、日本経済が飲み込まれてしまうのではないかとさえ言われてきました。

私は思いますに、日本の経済が戦後発展を遂げてきたのは製造業の優れた「物づくり」の力に与かるところ大でありました。昨今の日本の若者の学力の低下や物づくりに対する考え方に一抹の不安を覚えるところではありますが、依然として潜在能力は高いものがあると考えております。特に私ども中堅、中小企業が有するものは、必ずしもハイテクノロジーの分野ば

かりではないかも知れませんが、永年の間に蓄積され他国では真似のできない日本独特の技術、技能を持っております。この高度な物づくりの技術、技能をしっかり次世代に伝承し発展させていくことが日本の技術力の維持と更なる向上に重要であると思います。

日本はバブル崩壊以降いわゆる「失われた10年」と言われてからもなお自信喪失の低迷状態が続きましたが、最近の経済の回復と相俟い、このような日本の「物づくりの技術」が改めて再認識されつつあり、日本の力として復活してきております。

一方、中国の強さは何と言っても東南アジア諸国に比べて質が高く、且つ日本の賃金の十分の一とも二十分の一とも言われる安い労働力が豊富にあるということです。さらに人口13億人ともいわれる潜在需要があり、経済が発展すれば巨大な需要が生まれてきます。

このような中国の強さと日本の「物づくりの技術」の強さを共に補完し合い、切磋琢磨を心がけていけば、共存共栄できる関係を築く筋道が見えてくるのではないかと思います。

日本の企業は、これから世界の中でいかに生きていくかが課題だろうと思いますが、私どもの会社もこの考え方で日本、中国で物づくりを分担し、世界戦略の一環として中国の工場を育てて行きたいと考えております。